

## II-2-3

## 『海人・海民』論と造船について

南山大学・機構共同研究者  
後藤 明

## 1 海人 (kai-jin) 概念を国際学会で問う

インド・太平洋先史学会議IPPA (Indo-Pacific Prehistory Association)でのセッション  
Insular Technologies (島嶼的技術論)における問題提起

日本の学術伝統において、海の民を意味する海人・海民<sup>かいじん かいみん</sup>という概念が使われてきた。海人とは古代文献では「あま」と呼ばれ、潜水漁法などに長けた集団を指し、やがて安曇、宗像、住吉など特定の氏族を意味するようになった。日本の学術伝統ではその系譜を引いた概念が「かいじん」として古くは宮本常一 (1975, 1981)、さらには大林太良 (1983, 1987, 1990, 1996)、谷川健一 (1995)、荒木博之 ([田村・荒木]1991, 1996)、秋道智彌 (1995, 1998)らによって使われてきた。

海外の研究者も海の民を独特のカテゴリー、単に海で暮らす人々という以上に、特殊な人々であると捉える傾向がある。たとえばバルト海・北海の研究において次のように論じられている：

those who live and work by the shoreline have generally been perceived as different  
—outlandish in dress, habits, customs . . . . (Kirby and Hinkkanen 2000: 58).

このように「海の民」はそれ以外の民と異なった人々という認識がもたれる。

著名な日本史学者・網野善彦も非農耕民の存在を重視し、市場、港、道路などに暮らす人々、山や川あるいは海浜を生活の場としている集団の存在を指摘し、なかでも海で暮らす人を「海民」と定義している (盛本 2009)。

旧来の農民や漁民に含まれない人々には行商人、職人、芸能者などが含まれるが、その特徴の一つは生計が特定の手段に限定されない、弁別 (differentiated) されていないということである。海の民であれば、海に関係するいろいろな生計手段に依存している、すなわち漁業、製塩、水上運搬、交易、水先案内、あるいは海賊行為などを含めてである。網野は海民という表現を好んだが、海人と海民は英語に翻訳すると：

海人 = sea people

海民 = sea folks

などが適切かと考える。

そのニュアンスの違いは、海人が比較的自然発生的に形成された集団、海民は歴史が進んで支配体制が確立する過程で支配集団から支配されるか、あるいは逆に支配をすりぬけて生きているという、政治的に形成された側面の強い集団のような違いであろう。しかし本質的な違いはないと筆者は感じている。

## 2 日本の学術伝統における「海人（カイジン）」の概念

海人という概念を早くから使っていたのは民俗学者・宮本常一である。

宮本常一は次のような海人型式の2種を考えていた。

- (1) 専漁型：海への依存度が高く、陸に住居を持つものの郡や郷を形成しない。  
しばしば家船を持って男女が乗って移動も行う。
- (2) 半農半漁型：海岸に居住して漁労を中心とした生活を立てつつ、一方陸地にも土地を持って多少の農耕を行う者。古代では土地の占有権も認められときには郷や郡を形成していた。(例 海人郷、海人郡)

民族学者・大林太良は海人族と古代王権との密接な関係を指摘する。その根拠に海幸・山幸神話に代表されるように古代王権の成立には海の神話が重要要素になっていることである。また八十島祭りや応神天皇の後継者を決める際に海人集団を組み込むことの重要性が見えるという点である。

また大林太良は日本古代の海人族は日本列島に留まらず朝鮮半島や中国南部といういわば環東シナ海的な分布をしていたことを指摘する。

## 3 沿海文化とパシシル文化

大林太良は海人論との関連で「沿海文化」の存在を指摘する。日本列島は東西や南北に方言や文化風習の差があることは知られている。一方、それらの地域区分をいわば分断して海沿いに存在する文化があることも事実である。海女・海士が海沿いに分布するのは当然だとしても、その分布に重なるように頭上運搬、年齢階梯制、泣女、月小屋・産小屋など海と直結するように思われない文化要素も海岸沿いの分布を示す。これは気候帯や陸上交通とは次元を異にした、海沿いの集団関係が存在したためであろう。さらにその分布は古代の海人郡や海人郷の分布ともよく重なるために古代海人族の活動とも関連するであろう。

さらに大林太良は日本の「沿海文化」のモデルをインドネシア諸島のパシシル文化に求める。パシシル文化とはアメリカの文化人類学者、ヒルフレッド・ギアーツが提唱したものである。14世紀から18世紀にかけて、香料貿易を背景に成立した港湾都市ネットワークと密接に関係する概念である：

Malays, Javanese, Chinese and others — governed loosely by a local Muslim sultan. Ethnic

heterogeneity and a commercial orientation remain significant characteristics of the coastal people (Geertz 1963: 30).

すなわちパシシル文化とは特定のエスニックグループではなく、共通のイデオロギーとしてイスラムに影響をある程度受けたローカルなグループの集合体、中には華人のような移住者も含まれる複合的な集団であるということである。また：

Pasisir culture is characterized by its flexible modes of ecological adaptation: adaptive variety in the economy may take the form of village specialization, or may be more a matter of individual opportunism; the people often have several different sources of income — combining, for example, wet-rice farming with fishing, rubber tapping, or peddling (Geertz 1963: 58-59).

パシシル文化の特徴は：（１）ローカリズムとコスモポリタニズムの共存、および（２）多様な経済戦略の併用、である。（１）についてはバルト海の研究においても指摘されている：

(The seashore is) a curious mixture of marginality and maritime cosmopolitanism in many coastal villages, the two aspects interacting upon each other (Kirby and Hinkkanen 2000: 59).

パシシル文化は香料貿易という大航海時代の事例であるが、大林太良はメカニズム自体はもっと古い時代にも適応できるであろうとする。例えば筆者は南シナ海における「リンリン〇型」耳飾りに示されるような臨海性の文化はそれに相当すると考える。また先史時代の例ではオセアニアのラピタ文化複合、北方ではオホーツク文化のように著しく臨海性の文化に適応できるであろう（後藤 2010）。

またローカリズムとコスモポリタニズムの共存する海人的技術伝統の特徴は、遠方の技術、通常では接触することのない技術伝統の複合化であろう。それは小笠原・八丈島におけるアウトリガー式漁船に言えることである。ハワイ式のアウトリガーカヌーに和船の技術、さらに房総半島、伊豆七島あるいは沖縄の漁具が融合してアウトリガー漁船複合はなりたつのである。詳しくは別途論じている（後藤 印刷中）。

#### 4 民族学からみた「海人」概念の再評価とその洗練

海人論で重要な問題は二つある。まず日本で議論されてきた海人の概念が他の国の研究者にも意義あるものと認められるか否か。第2に、先住民の間でも海人のような概念があって、陸や山の民と区別される傾向はあるのか、という点である。

海人の定義はその生活基盤が海に依存することであるが、それは自給的な漁労活動を意味しない。それは海上交易や戦闘行為も含めた海の活動に主に依存するという点である。

海人は特定のエスニックグループを指さない。むしろ同じような生活基盤、アイデンティティあるいはハビトゥスを共有した集団というべきである。その民族背景はしばしば多様であった

と推測する。筆者は海人とはJ.Stewardの言う「文化的タイプ」のような概念ではないかと考える（スチュワード 1979）。

たとえばソロモン群島マライタ島のランガランガは現地でも自他共に*waleasi*と呼ばれている。*wale*は人間、*asi*は潮水であり「潮水の民」「海の民」として自他共に認識されている。海の民と陸の民が弁別（differentiate）される過程が重要である。

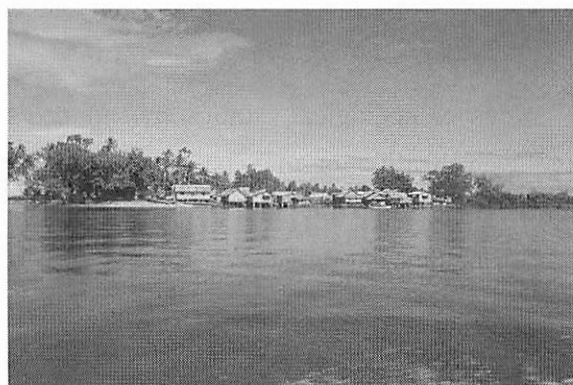


写真1 マライタ島ランガランガ・ラグーンの居住形態

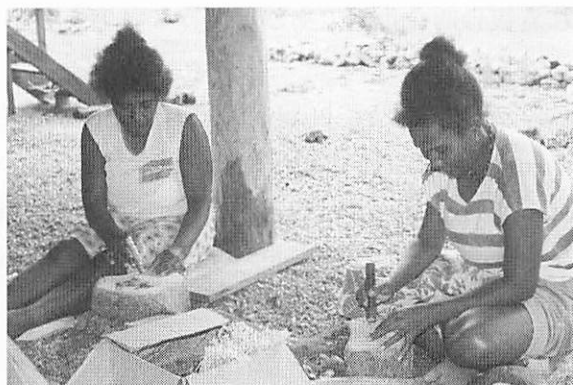


写真2 貝ビーズ製貝貨を作るランガランガの女性

彼らの相対する集団として*waletoro*（ブッシュの民）が存在する。ランガランガは今はマライタ本当の海岸部に住むが（写真1）、かつては島北部に住む海の民・ラウ族のように浅い珊瑚礁の上に人工島を作って暮らしていたのである（後藤 1996）。

またランガランガは漁労民ではない。むしろ彼らの経済は貝貨の製作と交易に基づく「海洋的職能＝交易者」という文化的タイプに相当する（写真2）。すなわち特殊な工芸を行い、それを交易、とくに海上の交易を行って生計を立てているのである。筆者はこれも海人文化型式の一形態であると考え。そしてインドネシア・マレ島の「海上・土器製作＝交易者」と定義される土器製作集団と同様の範疇になるであろう（後藤 2007b）。同様な議論はたとえばトレス海峡に住む潮水の民（saltwater people）が通常のアボリジニから弁別される現象にも適応できるであろう（Sharp 2002）。

## 5 考察：「環境適応」的パラダイムを越えて

海人集団の形成は「適応論的」な枠組み、あるいは「エスニックグループ」の枠組みでは捉えられない。従来の適応論的な解釈パラダイムからの脱却が必要である。地中海の研究では：

the need to move beyond current interpretative paradigms, largely characterized by adaptive models and simple, static concept of insularity, to develop more complex and culturally driven perspectives that recognize the extent to which islanders have consciously fashioned, and refashioned, their own identities and worlds (Broodbank 2002: 1).

またアイルランドの研究でも認知的な側面が強調される：

Local fishermen working everyday out at sea would have experienced a sense of isolation

and distinctiveness from broader community. They worked the coastal landscape at the same time as it worked on them . . . . So, we should be thinking about coastal communities as seeing themselves different from those further inland. (O'Sullivan and Breen 2007: 25 )

課題は多いが日本の学術伝統で使われてきた海人の概念は適応論を越えて、認識論あるいは現象学（例 近年の景観論）的枠組みの中でさらに洗練されれば、国際的に通用する概念になるのではないか。また海人という概念は従来漂海民（sea nomad）を含む海の民の多様なあり方を統合できる可能性があるだろう。

## 引用文献

- ・ 秋道智彌編
  - 1995 『イルカとナマコと海人たち—熱帯の魚撈文化誌』、日本放送出版協会。
  - 1998 『海人の世界』、同文館。
- ・ 荒木博之
  - 1996 『「海人」野茂英雄の研究：「海型」「ムラ型」の比較日本人論』、ノンブックス。
- ・ Broodbank, Cyprian
  - 2000 *An Island Archaeology of the Early Cyclades*. Cambridge University Press, Cambridge.
- ・ Geertz, Hilfred
  - 1967 Indonesian cultures and communities. In: R. McVey (ed.), *Indonesia*. HRAF Press, New Heaven.
- ・ 後藤 明
  - 1996 『海の文化史：ソロモン諸島のラグーン世界』、未来社。
  - 2003 『海を渡ったモンゴロイド：太平洋と日本への道』、講談社選書メチエ。
  - 2007a 「移動する日本人：『日本文化の形成』のもたらすもの」『別冊太陽：生誕100年記念「忘れられた日本寺院」を訪ねて宮本常一』
  - 2007b 「東部インドネシア・マレ島における土器製作システム」後藤 明編『土器の民族考古学』、同成社。
  - 2010 『海から見た日本人』、講談社選書メチエ。
  - 印刷中 「環太平洋海域の伝統的船舶技術の交流について——小笠原・八丈島のカヌー漁船を題材に——」『国際常民研究機構年報』。
- ・ Kirby, David and Marja-Liisa Hinkkanen
  - 2000 *The Baltic and the North Seas*. Routledge, London.
- ・ 宮本常一
  - 1975 『宮本常一著作集18：海の民』、未来社。
  - 1981 『日本文化の形成』第三巻、そしえて。
- ・ 盛本昌広
  - 2009 「海民という概念」、神奈川大学日本常民文化研究所編『海と非農業民：網野善彦の学問的軌跡をたどる』、岩波書店。

- 
- ・大林太良
    - 1983 「海と山に生きる人々：その生態・生業と文化」大林太良編『日本民俗文化大系 5：山民と海人』、小学館。
    - 1987 「沿海と内陸水界の文化」大林太良編『日本の古代 8：海人の伝統』、中央公論社。
    - 1990 『東と西、海と山：日本の文化領域』、小学館。
    - 1996 『海の道・海の民』、小学館。
  - ・大林太良（編）
    - 1987 『日本の古代 8：海人の伝統』、中央公論社。
  - ・O'Sullivan, Aidan and Colin Breen
    - 2007 *Maritime Ireland: An Archaeology of Coastal Communities*. Tempus, Stroud.
  - ・Sharp, Nonie
    - 2002 *Saltwater People: the Waves of Memory*. University of Toronto Press, Toronto.
  - ・スチュワード、J
    - 1979 『文化変化の理論』、弘文堂。
  - ・田村圓澄・荒木博之編
    - 1991 『古代海人の謎：宗像シンポジウム』、海鳥ブックス。
  - ・谷川健一
    - 1995 『古代海人の世界』、小学館。